
しゃれこうべの嘘

南沙夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しゃれこつべの嘘

【Nコード】

N0056E

【作者名】

南沙夜

【あらすじ】

その村には「神様」がいた。「神様」のいうことには従わなくてはいけない。そんな村に僕は違和感を感じ始めた。

1・きっかけ

僕の村は信仰宗教村だった。それもこの村でしか知れていない神をあがめていた。

神様は生きていらっしゃった。村はずれの山奥にある小さな神宮の中で、ただ一人おられた。だから村の女性が巫女となって毎朝食事を届けていた。

年に一回だけ秋のお祭りがあって、村中の人々が一人も欠けることなく集まり神宮の前で踊ったり酒盛りをして騒いだ。それは神宮の中の、僕らの神様が決めたことだった。

神様は生きていらっしゃるのだから神様の決めたことには従わなければならなかった。それでもその姿を見た人はいなかった。たまに子供が神宮の中に入っていくけれど、帰ってきた子はいなかった。大人たちは神様と一緒に暮らしているのだよと教えてくれた。僕は神様が気になるけれど中に入りたいとは思わなかった。

神様の名前をシフという。シフさまと言わないと怒られた。でも見たこともない、居るかもわからないのにあがめることが僕にはわからなかった。わからないでいられたのも幸せだったと思うようになったのは、ある時僕が親の言いつけを破った日に後悔したからだった。

秋のお祭りの後、村人は冬至になるまで夜に外を歩いてはいけないとされていた。もし歩いたら神様の罰を受けると教えられていた。

その日はそう、冬至だったのだ。僕が夜にトイレに行くため起きると、両親や上の姉兄まで外へ出て行くのを見た。夜に外へ出るなどという言葉も忘れ、皆の後を追った。

暗くてよくわからなかった。全て音だけで判断していた。暗闇に目が慣れてきた頃、皆が神宮へ向かっていることに気づいた。それも両親たちの他にたくさん、本当にたくさん草を踏む音がし、その気配が周りを囲むと僕一人だけが別の生き物であるように感じた。こわくなった。なぜ皆しゃべらず黙々と神宮へ向け歩んでいるのだろうか。誰も僕に親しげに話しかけてくれる人なんていなかった。しかし暗闇の中で目を凝らしてみると、大人ばかりであることに気づいた。

やがて神宮に着き、僕は社の裏にまわり息を潜めた。皆は前方の社の扉前に集まっていくな。突然、自分のいる後方から草を掻き分ける音がし驚いたが、その人は僕に気づかなかったのか、そのまま皆のいる場所へ向かった。やがて全員が集まったことが、その場の静寂と張り詰めた空気直感した。

社の扉が重々しく、ギィーという錆びた音を鳴らし、開いた。数分すると今度はねっとりとした水気のある何かを貪り食べる音がした。線みたいものが切れる音もした。見たわけではないけれどなんとなく音の正体が想像できて、僕はこわくて逃げ出したくて涙が流れていた。実はトイレなど思い出す前にちびっていた。

そこからどこをどう帰ったのかわからなかったが、気づいたときには布団の中で朝を迎えていた。僕は夢だったのかと思っただけで、シミをつくったズボンとかわらない布団を見て、現実だったことを悟った。

2・反抗

その日の朝は両親や姉兄が恐くて信じられなかった。それでも理性は取り繕い、母の料理にもおいしいと笑顔で答え、起きたばかりの兄に口元が汚れていることをさりげなく示して、食卓についている父に朝の挨拶をする。まだかわいらしい妹と弟を起こし、目覚まし時計を投げつけて壊してしまった姉にも朝を教える。そして学校へ行った。

学校は安全地帯だと思った。先生は大人だが子供の割合の方が高い。いざとなったらだれかを囫に逃げようと策を練ってみた。

夜に見た事をだれかに教えようとは思わなかった。そんなことをして大人に僕があのとときあの場に見ていたことが知られたら、明らかに殺されると感じていた。そして自分もいつかはあのようになってしまうのだというあきらめもあった。怖いけれど、これは恐らく神様の決めたことなのだ。だから抵抗しようとは考えなかったし、神様の言うことには従わなければならなかった。

夜は眠れなかった。またいつあの日のようなことが起こるのか気になっていた。だけでもうそんな日はなさそうだった。やはりあれは夢だったのだろうと思い始めた頃、一人の転校生が来た。

「脩寺はじめです。よろしく願いします」
なおじ

都会のにおいが漂う凜々しい顔立ちの男子だった。

はじめはすぐにこの地の子供と親しくなった。頭も良くて運動神経抜群の彼に適う者なんていなかった。それなのに憎めない奴。それとは反対に、先生や大人たちは彼と話す時どこもなくよそよそしい感じがした。気のせいだと思える範囲だったけれど。

はじめが来て1年後、僕の妹が神様に召された。家族は喜んだ。我が家から神子が出るなんて、と。弟は理解できずにぼんやりとしていたが、僕は悔しくてならなかった。神様は人攫いだと本気で思った。口の達者な最近なまいきな妹だったけれど、たまにケンカもしたけれど、嫌いななんかじゃなかった。いるのが当たり前すぎて突然のことで、その晩のお祭りは心もとなくぼんやりとしていた。

「なあ、はじめは？」

「はじめはよそもんだろが。シフさまがお呼びになられるわけないだろ」

さみしいねえという人の言葉で気がついた。

麻痺していた脳が働き始め、僕はこっそりはじめの家へ向かった。

彼は1階に自分用の部屋があった。何回も来ているがやたらと大きかった。窓をノックするとはじめが顔を出した。彼の顔にははつきりと驚きが表れていた。村中がお祭りで人がいないこと、はじめたちは参加できないことは彼も知っていたため、僕がいることが信じられなかったのだ。

「どうしたんだい？君たちは大事なお祭りだろ」

「いいから………聞いてほしいことがあるんだ。おまえ、秘密は守れるか？」

「えっ………う、うん」

はじめは困惑した様子だったが、空気を察してか、真剣な表情になった。

「手伝ってほしい。妹を、取り返したいんだ」

「とりかえす？」

「時間ないから説明は簡単にするからな」

僕はそれからシフさまのこととその神と村の関係、そしてあの日の夜のことを全て数分という時間に短縮して話した。上手くまとめられなかったけれど、はじめなら理解してくれると信じていた。案の定、はじめは理解してくれた上に妹の救出作戦にものってくれた。心強くて成功するような気さえしていた。

3・実行

「気をつけるのは大人だね」

僕たちはあの社への道を辿っていた。表から入ると見つかるため、わりと死角になる裏の左手側に出る道を歩いていた。社の裏側、しかも左手側は大きな岩があるのだ。ご丁寧に太い縄が巻かれている。その道は草がはびこり道ではなかった。けれど僕たち子供の間ではお気に入りの道のひとつだ。ジャングルだと言って走る。

「大人っていうのは20歳以上？」

「ちがう。兄貴と姉ちゃんはまだ18と19だ」

「自立できる歳かな・・・そうすると18歳以上か」

はじめはこの道が慣れないようで、さきほどからよくつまずいたり虫にびくついたりしていた。普段の彼からは想像できなかったのでおかしかった。

「笑うなよ・・・これでも初めて来た時よりは慣れたんだぞ」

「ごめん。でも1年間も僕たちといたのに・・・」

そんな会話をしていると祭りの明かりが見えてきた。僕たちは隠れて事の成り行きを見守る。祭りは終盤を迎えているようで、皆社に頭をたれていた。村長がシフさまとつぶやいた。

「君たちの宗教ってちよつと気狂いだ」

はじめは大真面目な顔で言った。やはり他人の目から見るとそんな

のかと、僕は自分が正しかったことを再確認した。

やがて祭りは終わり後片付けが終わると、だんだんと人影もなくなりあたりは静まりかえった。

「それが君たちの宗教に関わることなら、今夜がその儀式の日だね」

はじめの家で僕の説明を聞いた彼は、すぐにそう言った。

なんでも、宗教というのは儀式を決まった周期や日で行うらしい。とくに僕らのような熱心な宗教家たちは。だからもし妹を助け出すのなら、今日のそれも儀式が始まる前しかチャンスは残されていないかった。

僕らは誰もいないか確認しながら社の正面へと急ぐ。

あの時たしかに社の開く音がし、見たわけではないが恐らく彼らが食べていたのは神様に捧げられた子供たちなのだ。神様なんて初めからいなかったのだ。みんな自分たちのために、神様と一緒に暮ら

すといつて子供を集めていたのだ。

そう考えると恐ろしくなる。自分もそうなるとあきらめていた頃の自分が、恐ろしくなる。今まで信じてきたものが二セモノだったのかと思うと、かなしかつた。

しかしだからこそ、妹は是が非でも助けださなければならなかった。神様なんて嘘っぱちなのだ。社の中にいるのは生け贄の子供——妹のことだ。

僕は社の扉を開けるため石段を登った。はじめがその取っ手に手をかける。

「神様は——本当に存在しない？」

それははじめの声だった。

はじめも恐れているのだろうか。神というものが存在しないと信じていても、やはりその人知を超えたものは恐ろしいのだろうか。もしやシフ様は本当に存在しているのか。

「行くぞ」

振り返つてそう言つたはじめの顔は、先程の言葉などうそのように余裕の笑みだ。僕もはじめに臆病者だと思われなくなかったので平気なふりをした。

「おまえ、顔青いぜ」

そう言いながら彼は戸を開けた。

中は暗くてよく見えないが、月明かりがわずかに射し込み中がわり

と深いことがわかる。

そこは大きな空洞だったのだ。

「なんてことだ………」

はじめが絶望的のような声をあげた。

「はじめ………?」

僕はそんな彼を見るのは初めてで、今度こそ不安で心臓が張り裂けそうだった。

「……ごめん。僕は、僕は手伝えないよ………」

呻くように言い、はじめはくると向きを変えると走って行ってしまった。

「はじめっ……はじめ!？」

追いかけてよとはじめが消えた辺りを見回した。暗い。

鬱蒼と茂る木々、その木々を揺らす風、葉のこすれる音。それ以外に何も無い無音無気配。はじめの姿も消息ももうわからなかった。運動神経抜群の彼には、自分では追いつけない。なにより、体は硬直したまま。

4・落下

眠気がした。

視界がしだいにまどろみになる。自分は立っているのか、ちゃんと地面に足はついているのか、ここはどこなのかさえわからなくなりそうになる。意識をしばらくだして、思いっきり足をあげた。

「え、あれ、あれ？わわわわあああー！」

よろめいた瞬間、後ろの社内の空洞に落ちた。

落ちる、落ちる、落ちてゆく。この落下の先には一体何が存在するのか。暗い暗いトンネルの中のように、自分が本当に落ちているのかさえわからない。自分は本当は浮いている。いや、静止したままなのかもしれない。無重力の世界。

バサッ

突然おしりに何かの感触を感じた。そして自分が今まで落下していた事実がわかる。

目が開けられなかった。暗い世界に突如明かりが入り、目の働きが追いつかなかった。おそろおそろ目を開くと、夢の中だった。

「・・・・・・・・」

僕はどこに来てしまったのだろう。そればかりが頭をめぐる。

目の前に広がる風景はひどく滑稽で、信じ難いものだった。自分が今いるのは草のクッション。数人の子供たちが駆け回っている。

部屋の真ん中に大きな巨木。様々な実をつけ、静かに佇んでいた。その向こうには鉄くさい川が流れ、一見やわらかそうな石がそこらじゅうに転がっている。白いものもあった。木の枝らしきものもたくさんあった。巨木の周りは甘い果実のにおい。それを嗅ぐとおなかが鳴った。体の奥からその果実への欲求が起こる。

巨木は自分の背よりも大きかった。空腹を感じた瞬間、手の届きそうな気がしてきた。

食欲の欲求は止められない時がある。生き物ならば食べなければ生きてはいけない。手を伸ばす。枝が下がつてくるような気がする。そして自分も大きくなっていく。果実がその瑞々しさを主張している。

キー

錆びついた扉を開ける音がして我に返る。そして自分がここへ来た理由を思い出した。

空気の動く音が鳴っている。あわてて隠れられそうな場所を探した。どさっと何か重みのあるものの落ちた音。

手に汗が出始めて、必死に壁伝いに這っていくとカタツと開く場所を見つけた。

隠し扉だった。

気づかれないようにそろりとその内へ入った。中は予想外に、暗かった。しかし向こう側の音がよく聞こえるため、進入してきたおそらくは村人の行動がわかる。

その村人は草のクッションから飛び降り、様々な石を踏みつけながら川方面、巨木の方へと向かっている。その足取りは不安定な上、遅い。この特徴的な歩き方は、たった一人しかいなかった。

5・兄妹

自分と血の通った兄。あの人は真面目そうで頼りなく、いつも自信なさげに歩く。やればできる人なのに。それでも僕はそんな兄を尊敬していた。色々なことを知っていたから、何も知らない僕に真剣に話して聞かせてくれた。あの夜以来、そんなことはなくなってしまったけれど。

すべて僕が悪いのだ。僕があの時言いつけを守り、家から出なければあんなものを発見することなく今までどおり暮らしていけただろう。どうしてこんなことになってしまったのか。今まで信じてきたものたちを疑い、気づかないふりをした偽りの日常を営んで、なにが良いことなのだろう。

兄が巨木の実をもぎとった。あの熟れた実を思い出すとのが鳴る。

ここから飛び出して兄のもとへ駆けて行ったら、兄はどんな顔をするだろうか。こんなところへ侵入してしまった僕を、許してくれるだろうか。

兄はもしかしたら本当は、この変な宗教が嫌いなのかもしれない。だからあの歩き方でいるのかもしれない。反抗したくてもできない思いを抱いているのかもしれない。

汗でくっついた前髪を横にずらす。兄ならわかってくれるかもしれないという考えが胸を満たしていた。行くなら今だ。思い切り飛び出し、兄のいる巨木へと向かった。

兄はいなかった。それどころか、そこには誰もいなかった。子供た

ちもいなかった。ただ幻の風景が、あるだけだった。

ふと、カサツという音がして振り返った。草のクッションが少し揺れている。思いつきり飛び上がりその上にのってみた。

「さち・・・・・・・・・・」

妹がいた。あの生意気な妹が、そこに横たわっていた。

すべてを「ごちやまぜにしたような感情が急激に膨れ上がり、すぐさま妹のもとへ駆け、抱きしめた。

「帰ろう・・・・・・・・・・かえろう・・・・・・・・・・」

あんなに漂っていた甘い香りが、さっぱりなくなっていた。

6・翌日

「遅刻」という単語で飛び起きる。母が一階の階段下からほえていた。

「あ、ごめん。さち……………」

起きた拍子に、隣で寝ていた妹が転がり痛そうだった。まだ眠っているうちに着替える。

体が昨日の汗で気持ち悪かったけれど我慢した。妹に誰かが来たら押入れに隠れるようにと、物音は絶対させてはいけないということを言い、すぐさま階段を降り居間へと向かった。

居間ではすでに父と姉が座り朝食を食べていた。僕が食べ始めると母もテーブルについた。

「兄さんは……………」

「今朝方まで勉強していたらしいから、もう少し寝かせてあげた方がいいでしょ」

「センターまであと少しだしね……………」

これはもう予定内の会話。何度も想像して、シュミレーションをして自分に言い聞かせてきた。

母は嘘をついているのだ。昨日兄は、あの社の中にいたのだから。兄がどうやってあそこからすばやくいなくなったのかはわからなかった。しかし僕は帰り道を見つけた。あの時見つけた隠し扉は、実は上界へ出る階段があったのだ。道のりは長かった。家の階段の何十倍はあるように思えた。外に出たころには、向こうが薄明るい色をしていた。

「遅れるわよ！」

母の一言で我にかえり、大急ぎで食べ、支度をする。

「行つてきます」

そこから学校まで走った。はじめに事実を早く伝えたかった。

なのに、はじめは学校に来なかった。

翌日教室に入ると、はじめの机には花瓶が置かれ、花が活けられていた。何かの冗談だと思った。でも冗談にしてはやりすぎだと思った。だから彼を快く思わない生徒がいて、そいつが妬んでやったのだとも考えた。しかし先生は普段のように、話し始めた。

「脩寺はじめ君は、おととい亡くなりました」

しばらくの混乱、泣き出す子もいて黙祷した。それきり会話もなく、淡々と授業は進められた。放課後も全校が集まって校長先生の話や黙祷をしたけれど、それきりだった。それきり先生たちの口から、はじめに関しての何かを聞くことはできなかった。それでも生徒たちの間では口々に様々な噂がばらまかれていた。隣町で発見されたことは確かだったらしいけれど、その死に方について中には「バラバラ死体で発見された」などもありもしない恐ろしいものもあった。どれも信憑性に欠けていたから、結局知っている人はいないのだろう。僕たち子供では。

はじめの家に行けば何かわかるかもしれない。はじめの両親が何か教えてくれるかもしれない。そんな期待を胸に一度家に帰ると、妹を連れてはじめの家を訪れた。

呼び鈴を押してみる。数秒鳴った。けれど何の気配も、何の音もない。再び押す。しかし誰も出てはこなかった。出かけているのだろうか。

僕は家を見上げた。田舎にしても相当大きな家。今のような洋風な造りではなく、日本古来の造られ方をしている。この中で、はじめとはじめの両親三人は暮らしていたのだ。三人にしては大きすぎるくらいで、そして不気味だ。ここには本当に人が住んでいるのだろうかと思われるほど。

妹を握る手に思わず力が加わる。そつと、その戸を開けてみた。カラカラと開いた扉。田舎だからといって無用心すぎる。鍵をかけなければここらへんも物騒になってきたため、空き巣に狙われてしまう。

躊躇したが、靴を脱ぎ上がる。

「おじやましーす……」

誰もいないとはわかっていても言わなければいけないような気がして、少し控えめに入ったことを知らせた。もしかしたらおばさんは寝ているのかもしれない。

ひんやりとした空気が肌に触れる。冬だから当たり前だけれど、この家に何時間も人がいなかった証拠でもある。一歩ずつ足を進ませる。ギツときおり廊下がきしむ。そして最初の扉を開いた。ここは居間になっている。

「……………」

誰もいなかった。人はいなかった。けれどそこは荒らされたように散らかり、原型をとどめたものは何一つなかった。そしてその壁には、大きく乱雑な字で赤々とながかれていた。

“
つぎはあなた
”

7・そして彼は

逃げるしかない。あの日あの夜あの場にいた、はじめは殺され次は僕。

逃げなくちゃいけない。それしか生きるすべはない。勝たなければならぬ、この狂った宗教に。

妹をぎゅっと抱きしめると、僕はその家から出た。村を出なければいけない。日が暮れるより早く。そうしなければ妹はまたひどい扱いを受けることになってしまう。弟はおそらく何も知らない中で、生きていける。それに僕が今このときそれを終わらせることができれば、弟たちは普通の生活を送れるかもしれない。そうだ、僕しかないのだ。

走った。誰の目からも逃れられる場所、そして村の出口を探してこうしてみると、自分たちがどれだけ閉鎖的な場所にいたのかわかる。村の出口などわからなかった。とりあえず同じ方向にまっすぐ向かっていけば、いつかは境界線に辿り着くはずである。

なるべく家や人が集まっているような場所は避けた。妹を見られたらまた厄介なことになる。妹はまた、神に召されることになる。

「ねえ、どこに行くのかな」

左側から声がした。幼いこの声には聞き覚えがある。しかし立ち止まるわけにはいかない。そのまま走り続ける。走りにくい雑木林を抜ける。

「一緒にあそぼうよ」

「なんで走ってんだよ」

「どこに行くの」

「どこかに行くの」

「どこに行くんだい」

「どこに・・・」

後から後から左右に村人が、子供から年寄りまで出てくる。こわい。

もしや見張られているのではないだろうか。誰に？誰がそんなことを知ったのか。

「ねえ・・・」

「おい」

「どこ・・・」

これでは逃げられない。怒りと焦りと不安と恐怖ばかりが募って、足がもつれそうになる。つかまるのはいやだ。

気づくと、目の前が開け社が建っていた。はめられたのだ。あの村人たちを避けていたつもりが、いつの間にか誘導されていたのだ。だまされたのだ。逃げることができなかった。それどころかわなにかかるとは。

僕の周りを数人の男が囲んだ。その中の一人が、一歩前へ出てきた。

「そのしやれこうべを渡しなさい」

男は右手をさしのべた。その威圧感に圧迫されそうになる。

負けてはだめだ。さがってはだめだ。妹は、守らなくてはいいけない。

「これが最後だ。そのしやれこうべを渡しなさい」

「いやだ！これは妹だ。僕の妹だ。おまえたちが妹に何をしたか、僕は知っている！おまえたちなんかに・・・渡すものか！」

体中に噴き出した汗で目がしみた。言葉を吐き出したことすべ

ての今までためこんだ感情に、抑制がきかなくなった。

「おまえたちが……おまえたちが妹を殺し、はじめを殺し、子供たちを殺してきたんだっ……！」

男たちは何も言わない。ただ、僕の腕の中で眠る妹を欲している。僕の声など聞こえていないかのように。

目の前にいる男は、向かいの家の人だった。筋肉隆々で猛々しいこの人は、よく村の工事に参加していたり、お祭りの準備もしていたり、とにかく僕たちも好きだった人。誰からも好かれ、頼りにされ、ここにいる男たちはみんな、そんな人たちばかりだった。知らない人なんていなかった。村人でわからない人なんて、会ったことのない人なんて、いなかった。なのにどうしてだろうか。今の僕は僕の知らない顔で、僕を追いたてる。

でもわかった。僕はこんなにも村に守られていたのだと。幸せな暮らしを築けていけた、今まで生きてこれたのは、すべてこの村の、村人たちのおかげなのだ。この宗教のおかげなのだ。そうでなければこんなにも、皆とつながっていることなんてできなかった。信じあえることなんてなかった。犠牲はあるけれど、それでも人は犠牲の上に成り立つものなのだから仕方のないことだったのだ。

それでも、後戻りはできない。いまさら謝ることなんてできない。普通の世界では、僕の考えが当たり前なのだ。

「これは僕の妹だ。絶対に、おまえたちなんかには渡さない……」

「妹？何を言っている。おまえの妹はここにはいない」

男はあきれたように言った。

この男はもう狂っている。いや、この男だけではない。この村人全員。そう、こいつらが狂っている。僕は正しい。長年暮らしてきた妹を見間違えるはずなどない。

「うそだ。そう言ってだまそうったってそうはいかないから……」

……

必死に男を睨んだ。それしか抵抗ができなかった。

「おまえはずいぶんと過ちを犯した。その中のほとんどはおまえが黙っていたら見過ごせたものだ。しかし、これは禁忌だ。神を拉致し、神を村から出そうなど……おまえはおかしい」

「うるさいうるさいうるさい！ 僕はおかしくなんかいい！ おかしいのはあんたたちで、悪いのもあんたたちだ！ 僕はおかしくないし、悪くない！」

認めたくなかった。それでもどこかで自分は恐れていたのだ。汗ばかりが噴き出る。

「悪いことをしているという罪悪感があるのか？ ならばおまえもわかってはいるはずだ。それが、なんなのかを。一体誰なのかを。大切な妹か？」

認めない。決して認めたくない。妹が、死んだのだと。だって妹は僕の腕の中で実在している。本当にいる。髪も目も鼻も口も手だって、足だって、胴体だって、きちんと人間の形をして、僕らのように動くし、しゃべる。

「おまえも時期がきたようだ」

そう言つと男たちは円陣になった。さっきの男が何かをつきだした。

それはあの時の、あの甘い香りの実だった。

僕は無心にそれに手を伸ばし、受け取った。

肌触りが良く、重みで中身がぎゅっしり詰まっていることがわかる。瑞々しいその実にごくりを唾を飲み、一口かじる。

妹がすんと、と腕の中から落ちた。かまわずその実を食べ続ける。

妹だったものがごろごろと地面を転がる。

妹だと思っていたものが茂みの向こうへ消える。

男たちが必死に、神様を追いかけた。

甘い香りを嗅ぎつけた鳥が、林中を飛びまわっていた。

7・そして彼は（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

一応ホラーを意識して書いてみましたが、いかがだったでしょうか。
感想を頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0056e/>

しゃれこうべの嘘

2011年1月23日14時53分発行